野ネズミ被害のより効率的な防除のために

－積雪下でのネズミの分布調査－

エゾヤチネズミ（写真－１、以下ネズミとする）は主に晩秋から冬の間の積雪下で樹木の樹皮をかじり、林業被害を起こします。これまでの研究でネズミは冬眠をせず、雪の下で地表面を活発に活動していることが知られています。しかし、雪の下におけるネズミの生活は詳しくわかっていません。そこで、より効率的な被害対策に役立つ情報を得るため、積雪期を通してネズミの捕獲調査を行いました（写真－２）。今回は積雪前後のネズミの分布について紹介します。

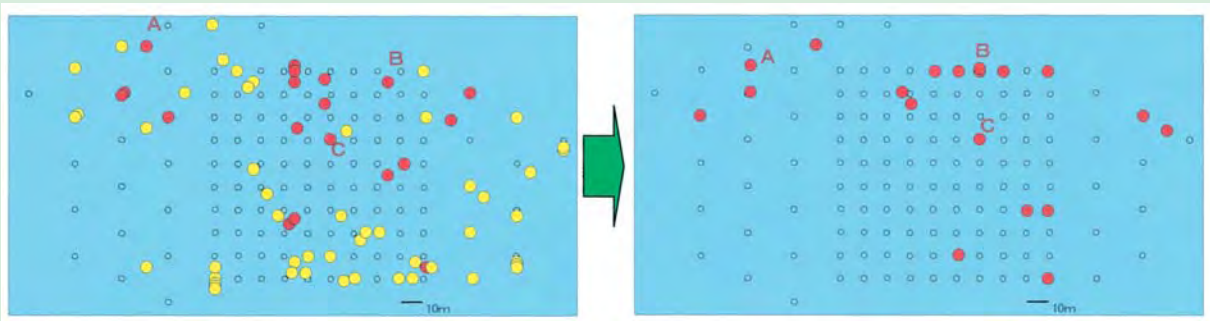
積雪前11月と積雪後翌年１月のネズミの分布は図－１のようになっていました。黄色や赤丸はネズミ１頭ごとの活動範囲の中心を示しています。黄色の丸で示したネズミ（全体の約2/3に相当）は、翌年１月には調査地からいなくなりました。この期間に個体数の減少が起こったこと、新しく調査地内に侵入してきたネズミがいなかったこと、いなくなったネズミのほとんどが春になっても捕獲されなかったことから、おそらく死亡していたと考えられます。赤丸で示した調査地内に残っていたネズミのほとんどは、アルファベットで示した３個体に典型的に見られるように、積雪前の活動範囲から20mも移動していませんでした。また、積雪後のネズミの分布は集中分布をしていました。

このようにネズミは積雪前後で大きく移動しないことから、積雪前にいた場所周辺の樹木をかじると推測されます。今後、ネズミが積雪期に集中する場所の環境条件などについて検討を行い、防除に反映させていきたいと考えています。

（道北支場）

写真－１　エゾヤチネズミ

写真－２　雪の下にワナを設置してネズミを捕らえる（１月調査）



図－１　11月（左）と翌年１月（右）のネズミの分布
白丸はワナを設置した場所。黄色と赤丸はエゾヤチネズミ１頭ごとの活動範囲の中心を示す。黄色の丸は翌年１月にいなくなっていたエゾヤチネズミの行動範囲の中心。赤丸は翌年も捕獲できたエゾヤチネズミの行動範囲の中心。典型的な３個体をアルファベットで示した。